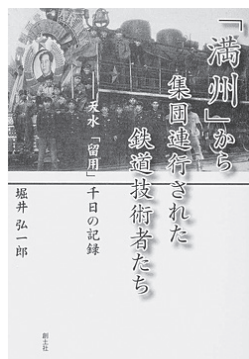


堀井弘一郎著

# 「満州」から集団連行された 鉄道技術者たち

——天水「留用」千日の記録

創土社／2015年2月／224頁／1400円＋税



芦沢知絵

## 本書の概要

戦後七〇年を経て、日中間の歴史問題がなお懸案とされるなか、日中戦争をめぐる研究の重要性はいっそう高まりつつある。特に近年は、戦後の日本人引揚げ・抑留や、対日戦犯裁判、戦後補償問題など、戦争終結後のさまざまな問題についても研究が進められている<sup>①</sup>。本書は、そうした諸問題の一つとして、戦後中国における日本人の「留用」問題に焦点をあてた、意欲的な著作である。

著者の堀井弘一郎氏は、前者において、日中戦争期に汪兆銘政権が行った大衆動員政策、いわゆる「新国民運動」の実態を明らかにした<sup>②</sup>。一方、本書では戦後の中国社会、しかもそこで暮らした日本人に視線を転じている。一見、前著とは全く異なるテーマだが、その根底には、戦争という政治変動のなかで揺れ動く、日中双方の「市井の人びと」への、共通の眼差しがあるように思われる。

戦前から戦時にかけて、中国には多数の日本人が居留した。その大半は戦後の

集団引揚げにより日本に帰国したが、鉄道・工場・鉱山などの技術者や労働者、医師・看護師、軍人など、一定の技術や知識をもつ日本人は、中国側からの要請をうけて、半ば強制的に中国に残留することになった。彼らは「留用一者（以下、括弧省略）」と呼ばれ、戦後の中国経済の復興や産業発展に、重要な役割を果たしたとされる。その存在はNHKのドキュメンタリー番組で取り上げられることはあったが、学術的研究は長らく「空白」状態におかれてきた。近年、鹿錫俊らの研究により、ようやくその実像が明らかにされ始め、国民党政府による上海の在華紡関係者の留用については朱婷・富澤芳亜らが、東北地方の鞍山鉄鋼所技術者の留用については松本俊夫が、それぞれ具体的な検討を行っている。

一方、中華人民共和国成立以後の中国関内における留用については、これまであまり論及されてこなかった。本書は、そうした研究の間隙を埋めるべく、甘粛省の天水地区における鉄道技術者の留用に注目し、その実証的な解明を試み

る。彼らの二年半余りに及ぶ留用の史実を、「できうる限り詳細かつ具体的に叙述し、その歴史的体験を記録に書き留める」ことが本書の目的とされ、それこそが「近年日中関係が非常に厳しい緊張関係にあるなかで、その打開の糸口を探ろうとするさまざまな試みに連なる一つの基礎作業」になると、著者は述べている（八頁）。

### 本書の構成

本書は、「はじめに」「おわりに」を除く、全九章から構成される。全体を通して、日本人の鉄道技術者たちが、国共内戦を経て中華人民共和国に留用され、一九五〇年より天水での鉄路建設に従事し、一九五三年に帰国するまでの歴史的体験が、時系列にそって詳しく叙述されている。まず、第一〜三章では、日本人留用者たちが天水へ移動し、その地に居住するまでの過程が明らかにされる。続いて、第四〜七章では、天水地区において日本人たちがどのように働き、暮らしたのか、労働と生活の実態が明らかにさ

れる。最後に、第八・九章では、日本人留用者たちの帰国にいたる経緯と、帰国の状況が明らかにされる。以下、各章の内容について簡単に紹介したい。

第一章では、終戦後の日本人留用についての概略が示される。一九四五年の終戦直後、中国大陸には二〇〇万人以上の一般邦人が残された。大半は一九四八年八月までに日本へ引揚げたが、国共内戦が勃発するなかで、三万二〇二二人の日本人が国民党側、三万八一〇人が共産党側に、技術協力のため留用された（一九四七年時点）。さらに、一九四九年一〇月の中華人民共和国建國後は、約三万五千人が中国残留を余儀なくされ、特に東北地方（旧満洲）の留用者は約三万四千人にのぼった。そのうち、旧満鉄の鉄道部門で働く日本人とその家族、およそ一九〇〇人が天水に集団連行されることになった。

第二章では、日本人鉄道関係者の一行が、東北各地から三〇〇〇キロ以上離れた天水へ移動する道程を、豊富な史料をもとに詳しく追っている。最終目的地を

知らされないまま、天津・北京を経て西安に到着した一行は、そこから見知らぬ西方の地、「テイエンシュイ」（天水）へ向かうと告げられる。その時の日本人の反応が興味深い。中国側に繰り返し帰国を要求するも拒否され、次第に諦念し、現実を受け入れる人々。それぞれの心境の変化が、当時の回想とともにリアルに叙述される。

第三章では、一九五〇年一月以降、ようやく天水に辿り着いた日本人たちの、居住環境について概観している。古い天水市街に入った一行は、いくつかの居住区に分かれて暮らすことになった。最初は電気・水道もない粗末な仮家住まいに戸惑いつつも、翌年には井戸付きの社宅を提供され、ようやく安定した暮らしができるようになる。その後、一九五三年三月までに、計九二九人の日本人がこの居住区で生活した。

第四章では、日本人が従事した労働について述べられる。日本人の鉄道技術者が天水に連れてこられた目的は、西北地方の東西を結ぶ天水く蘭州の鉄道路線、

「天蘭線」を完成させるためであった。

天水地区では、二〇〇人ほどの日本人技術者が各職場に分散配置され、中国人技術者・労働者と共に働いた。「天蘭線」建設における重要設計のほとんどは、日本人技術者の手によるものであり、その「貢献」は大きかったとされる。一方、日本人のなかには職務への不満を持つ者もあり、また一九五二年九月に「天蘭線」が開通した際、中国側の公的記録では日本人技術者の存在が伏せられていた事実も明らかにされている。

第五章では、日本人の日常生活について述べられる。当初は食事などの待遇をめぐり、中国側と折衝する場面もあったが、次第に日々の「近所づきあい」を通して、日中両国民の交流がもたれるようになったという。また、天水地区の日本人は、賃金・待遇の面で優遇されており、日本からの送金も許可されていた。

第六章では、日本人の子どもたちの教育状況について述べられる。日本人子弟たちは、天水市内や近隣に設けられた日本人学校、もしくは中国人学校に併設さ

れた「日籍班」（天水鉄小・中）に編入された。そこでは日本人教師が日本語で授業を行ったが、運動会などの学校行事は日中合同であった。また、一部の中学生は日中混成クラスに在籍し、共に寮生活を送った。中国人の教師・同級生たちは、みな日本人生徒を温かく迎え入れ、純朴な師弟・友人関係が築かれたという。一方で、学力低下や「思想的偏向」も不安視されるようになった。

第七章では、そうした政治教育の影響について、より詳しく言及している。天水では大人も毎日、「民族幹事」（日本人工作員）による「時事学習」を受けた。三反・五反運動などの政治運動が高揚すると、日本人への「思想改造」は激しさを増し、日本人同士の対立や精神的な抑圧が強まっていったとされる。

第八章では、一九五二年一二月の北京放送後、日本人残留者の帰国が急ぎ進む過程が示される。この決定の背景には、日本人技術者による技術移転の終了と、ソ連人技術者の中国派遣があったと著者は分析している。こうして一九五八

年七月までに、約三万五千人の日本人引揚げが実現し、天水の留用者一行も、一九五三年三月〜七月にかけて、上海経由で帰国することになった。中国政府による日本人への「帰国支援」は、表向きは日中「友好運動」とされ、上海では旅費・食事が支給されるなど異例の好待遇を受けたという。

第九章では、留用者の帰国後に言及している。彼らの境遇は千差万別であったが、公安の監視や就職困難、子どもの学業の遅れや差別など、苦境に直面した者が多かった。一方、一九五四年には天水の留用者の親睦団体「天水会」が発起され、日中国交回復後は定期的に天水訪問が行われるなど、帰国後も積極的な日中友好運動が図られたとされる。

最後に著者は、「天水地区の留用者に關しては、留用政策の被害者という意識は希薄である」とし、その理由を中国側の温情的待遇に加え、天水地区における日本人と中国人の共同労働・生活に求めている。さらに、こうした民間の日中交流の経験こそが、戦後の日中關係をつな

ぐ「宝」になると結論づける。

### 本書の意義・問題点

本書の意義は、およそ二点に集約されるよう。

一つめは、これまで先行研究で詳しく言及されてこなかった中国関内の、特に天水という中国内陸部における日本人の留用の実態を、明らかにしたことである。先行研究による上海や東北地方の事例とは異なり、天水の留用は長期に及ぶ移動や居住環境の不便さなど、多くの不安と困難をとまなうものであった。一方、本書で描かれる彼らの生活風景は、厳しくもどこか牧歌的である。小さなコミュニティのなかで、日本人と中国人の日常的な交流が育まれ、その経験が帰国後の日中友好運動に受け継がれていったとする著者の指摘は、従来の留用研究に新たな一頁を付け加えたといえよう。

二つめは、天水における日本人の留用体験が、各種の史料を組み合わせたうえで、多面的に論じられている点である。天水の鉄道技術者の留用については、N

HKのドキュメンタリー番組でも取り上げられているが、こちらは概ねインタビューなどの口述記録がもとになっていた。それに対し、本書は日中双方の文献史料、留用者の手記、さらに著者独自のインタビュー調査をふまえ、より客観的かつリアルに留用の実態を叙述している。また、同じ天水の留用者のうち、鉄道技術者だけでなく教育従事者や一般労働者、その家族や子どもの体験にも言及されており、彼らの異なる環境や心境の違いを含め、まさに留用という経験の多様な側面が明らかにされている。

一方で、本書にはいくつかの問題点も見受けられる。

第一に、天水とそれ以外の地域における留用の違いが、十分に示されていない点である。前述したように、天水という地区は、東北地方や上海などと比べて特殊な環境であった。しかし、そこでの留用体験が、他地域の事例と比べてどれほど異なるものであったのか、また環境の違いが留用者の心情にどういった影響を及ぼしたのか、これらの点について本書

では明確な記述がなされていない。著者は、中国共産党の温情的待遇と現地における日中交流の経験が、留用者の好意的な意識につながったとする。しかし、前掲の富澤論文によると、上海で国民政府に留用された在華紡技術者のなかにも、進んで中国に残る者は少なくなかった。その心底には、自分たちが培ってきた経営・管理面を含む技術そのものを、戦後中国に継承することへの強いこだわりがあったとされる。本書を通読する限り、天水の日本人鉄道技術者たちにも、元々同じような自負や誇りがあり、それが留用の事実を肯定的に受け入れさせたとも考えられるが、そうした留用者の主体的動機に対して、国民政府と共産党政権の留用政策の違いや、地域・職場の差異が、具体的にどういった作用を及ぼしたのか。今後、より詳しい比較検討が必要であろう。

第二に、留用者の帰国前と後の経験が、あまり関連づけられていない点である。著者は本書の「おわりに」で、帰国後の経験が留用の記憶に影響していると

いう、NHK取材班ディレクターの見解を紹介している（一九四頁）。また、従来の満洲移民の研究においても、帰国後から現在に至る人生を「まるごと」分析することの重要性は論じられてきた。一方、本書ではそうした留用者の帰国前後における経験の連続性や、帰国後の体験にもとづく記憶の恣意性について、あまり注視されていない。例えば、帰国後の「天水会」の活動にしても、積極的に関わった人もいれば、そうではない人もいたはずだが、そのような帰国後の行動の違いについて詳しい言及はなされていない。また、前述したように、本書の出色の一つとして著者独自のインタビュー記録の利用があるが、その点に関しても、対象者の帰国後の経歴や補足情報が足りないように感じられた。インタビュー記録は大変貴重な史料であるが、それだけに引用する際にはより一層の慎重さが求められるだろう。

最後に、天水の留用者が果たしたとされる「貢献」について疑問が残る。現在、留用問題は日中双方においてもはや

タブーではない。むしろ、著者も指摘するように、中国では留用者の帰国以降、その記憶が「日本人の貢献物語」として再構成されてきた（八九頁）。また、日本人留用者たちも、そうした中国側の認識を肯定的に受け入れてきたといえる。では、実際のところ、彼らはどれほどの「貢献」を中国にもたらしたのか。天水の鉄路建設の事例にしても、上海の在華紡や鞍山鉄鋼所の事例にしても、日本人留用者は自分たちの技術を中国に移転するため、協力を惜しまなかったとされる。一方、天水や鞍山では、一九五〇年代初頭から早々にソ連からの技術導入が進み、日本人の留用は単なる実務上の「つなぎ」にすぎなかったようにも見える。はたして、日本人技術者たちが残そうとした技術や生産方式は、戦後の中国にどの程度継承されたのか。本書でもその説明は今後の課題とされているが（一六七頁）、それにはまず中華人民共和国

初期の鉄道建設の実態が、明らかにされなければならない。留用問題は、戦後の日中関係史だけでなく、中国経済史の重

要な研究課題でもあるといえよう。

以上のような問題点はあるものの、本書による日中関係の「打開の糸口」を探る試みは、われわれに重要なメッセージを与えてくれる。また、全編を通して、豊富な写真・図を用いつつ、平易な文章で書かれているため、非常に面白く読みやすい著作である。ぜひとも、より多くの読者に本書を手にとっていただき、留用の史実を知ってもらいたい。それこそが、本書の真の意義になると思われる。

## 注

- 〈1〉 それぞれ代表的な研究として以下が挙げられる。若槻泰雄『戦後引揚げの記録』時事通信社、一九九一年。大澤武司『毛沢東の対日戦犯裁判——中国共産党の思惑と一五二六名の日本人』中公新書、二〇一六年。殷燕軍『中日戦争賠償問題——中国国民政府の戦時・戦後対日政策を中心に』御茶の水書房、一九九六年。
- 〈2〉 堀井弘一郎『汪兆銘政権と新国民運動——動員される民衆』創土社、二〇一一年。

〈3〉 書籍版として、NHK「留用された日本人」取材班『留用された日本人——私たちは中国建国を支えた』日本放送出版協会、二〇〇三年。

〈4〉 鹿錫俊「戦後中国における日本人の留用問題——この研究の背景と意義を中心に」『大東アジア学論集』六号、二〇〇六年ほか。

〈5〉 朱婷「抗戦勝利後国民政府的『留用政策』與『中機公司』」上海社会科学院『學術季刊』一九九八年第四期。富澤芳亜「在華紡の遺産——戦後における中国紡織機器製造公司の設立と西川秋次」森時彦編『在華紡と中国社会』京都大学学術出版会、二〇〇五年。

〈6〉 松本俊郎「鞍山日本人鉄鋼技術者たちの留用問題——中国東北鉄鋼業の戦後復興」『人文學報』七九号、一九九七年。

〈7〉 富澤、前掲論文、一八九—一九〇頁。

〈8〉 蘭信三『満洲移民』の歴史社会学』行路社、一九九四年。

〈9〉 ソ連からの鉄道技術の導入過程については以下の研究がある。これによると、一九四九年前後から東北地方の鉄道にはソ連技術の導入が進んだとされるが、その他の地域については言及されて

いない。川井伸一「中国東北鉄道におけるソ連邦「包車制」の導入——新中国の企業管理責任制の先駆」『アジア研究』第三四卷一・二号、一九八七年。